

対象書籍

高橋康史, 2020, 『ダブル・ライフを生きる〈私〉——家族に犯罪者をもつということ』晃洋書房

文責：盛田賢介

「自己を朦朧体で描く」

はじめに

手に取り本書を持ってみれば、表紙には、濃い紫と濃いピンク色の二つの重なりあった円があることに気づく。そして、重なり合った領域には、淡い紫と淡いピンクが相混じった色の領域がある。さらに、淡い領域の中心には、白抜きされた円がある。この紫の円とピンクの円がまじりあう汽水域の中心の白い円は、縁取りされているだけであり、色が塗られているわけではない。あらかじめ妄想をたくましく述べておこなうならば、この書籍の表紙そのものが、高橋の研究がいかなるものかを伝えている。濃く塗られた二つの円のあいだにある淡い色の領域と、その中心の白抜きされた円の領域。タイトルにもあるダブル・ライフという概念を通して高橋が理解しようとする「家族を犯罪者にもつもの」の経験とは、この淡い領域と白抜きされた円に象徴されている。

妄想はここまでにしたうえで、コメントをどのような順序でおこなうかあらかじめ述べておく。まず、全体の要約をおこなう。その後、三点の疑問点・論点を提示する。

1. 要約

1.1 本書の問題意識と理論的視座

本書の問題意識を私なりの形で示すことから始めよう。本書は、家族に犯罪者もつ人びとの能動性と複雑性をできる限り理解しようとした著作として位置づけられる。全体を通して幾度も、経験を単純な図式に還元しようとする姿勢が批判される。そうした図式はほとんどの場合、「AかBか」という排他的な二項対立である。こうした執拗な批判の根底にあるのは、「マイノリティ」の生を二者択一へと押し込める両極的な把握への警戒である。同時に、「マイノリティ」として生きる人を一色で塗りつぶし、所与として理解してしまうことへの警戒から、できるだけ「マイノリティ」として生きる人びとに能動性を認め、関係論的で動的な過程として把握しようとする意志が本書を貫通している。この二つに対する警戒と乗り越えこそが、本書の最も重要な問題意識である、と私は読んだ。

したがって、本書の目的は「アイデンティティ管理がおこなわれる相互行為が、自己と他者という二元的な主体による場面に回収されないものとして捉えたうえで、家族に犯罪者をもつものがいかにしてアイデンティティを管理するのかを明らかにする」(11-2)ことにある。

ここでいうアイデンティティ管理とは何かを説明するためには、その前提となるゴフマンによるスティグマ概念を参照する必要がある。本書において、スティグマとは、「自己アイデンティティをめぐって対自的なアイデンティティと対他的なアイデンティティの齟齬」(40)として理解されている。そして、その齟齬を埋めるための方法としてアイデンティティ

管理が理解されてきた。

これまでの研究では、アイデンティティ管理において、自己と他者の、つまりスティグマを付与するものとスティグマを負うものという二対の主体関係からとらえる傾向にあった。だが、この捉え方を敷衍していけば、「社会と自己」の関係を相互排他的に理解してしまう。つまり、草柳のいうように、「社会から見た自己」に沿うように調整する「自己否定と社会同調」のモノポリーモデルと「社会から見た自己」への疑問を呈する「自己肯定と社会の否定・変革」の肯定主張モデルという二つとして理解してしまう。この両極的理解は、スティグマを負うものの生を、社会の同調者として苦しむか、社会に異議を申し立てる英雄として苦しむかの二つしかないという絶望をもたらす。現実の生は、そうではない。そこで高橋が導入するのが、自己の内部での分裂＝ダブル・ライフである。

ダブル・ライフとは、大村英昭の概念である。大村は、「スティグマを負うものが『スティグマを負う自己と常人としての自己』という二つの自己を生きるということ」を〈ダブル・ライフ〉という概念から捉え直した(39)。大村の議論を敷衍したうえで、本書では「スティグマを負う者を、スティグマを貼る側であり、スティグマを貼られる側であるという二つの立場を有する主体として捉える」(40)のである。そこから、常人としての視角を学んでいくプロセスであるモラル・キャリア概念とスティグマ自身のもつ不可視性が問題化される。この二つの視点は、自己内部のプロセスとして「家族に犯罪者をもつ者」の経験をとらえていく必要性をもたらす。

このダブル・ライフという観点から、自己内部の関係性を動的な過程として描くことが可能になる。すなわち、本書の問題意識は、エリクソン由来の、アイデンティティを同一性としてとらえることから離れていく。自己とは「すでに存在する複数の社会規範に対して自己を定義づけていく諸過程」(49)であり、「アイデンティファイという実践」(49)として捉える。つまり、自己はなんらかの所与ではなく、他者や社会規範に対応して何者かになり続けていくという過程なのである。

1.2 経験的研究へ

1.2.1 ある人が、他の家族成員が罪を犯したことによっていかにして「犯罪者の家族」になるのか

再論すれば、本書の目的は「アイデンティティ管理がおこなわれる相互行為が、自己と他者という二元的な主体による場面に回収されないものとして捉えたうえで、家族に犯罪者をもつものがいかにしてアイデンティティを管理するのかを明らかにする」(11-2)ことにある。この目的は、二つの問いに変換される。すなわち、①ある人が、他の家族成員が罪を犯したことによっていかにして「犯罪者の家族」になるのか②社会との折り合いをつけながら「犯罪者の家族」としての自己をどのように生きているのか、という二つである。①の問いは、4・5章で、②の問いは6・7章で取り組まれる。

①の問いは、4章と5章でそれぞれ異なった課題と方法により分析される。まず、4章では、①の問いが、スティグマの内在化として捉えられている。さらにいえば、「スティグマ

を負う者にとっては恥を感じる事がスティグマ経験となり得る」(67)ことから、1.どのような恥を感じるか2.どのように恥は生起するか、という二点が問題化される。ここで参照されるのが、Condryの研究である。しかし、Condryは恥の分類をおこなったが、どのように恥が生じるのかは明らかにしていない。したがって、その点の解明が重要になるだろう。以下、具体的なプロセスとして実証研究とその分析結果を提示しよう。

はじめに本章は、Condryの「恥の綱目」枠組みを用いて、語りから恥が生じているかどうか検証する。そして、恥が生じていた場合、恥の生成プロセスを検討するというステップを踏んでいる。その結果として、データから帰納的に、73ページの図1で示されたような「恥の感情が生起されるプロセス」が提示される。

恥の生起メカニズムは、本人が犯罪に該当する行動をして生起され、他者や社会、とくに刑事司法機関を中心とした他者との相互作用により、自己へ異質な存在としてまなざしを向けていく。そして、事件前後の社会における自己の位置づけの落差を認識することにより、生起する。つまり、出来事や刑事司法との相互作用を経て、事件前の自己と事件後の自己を明確に区別し、「両者の社会における自己の位置づけの落差を認識することで恥の感情が生起していた」(85)のだ。

とはいえ、「犯罪者の家族」をいかにして自己に引き受けていくのだろうか。これまでの先行研究ではスティグマを負った者は、沈黙の期間を経験することが知られている。つまり5章では、語りえないことが語れるようになるプロセスの検討が試みられる。語れるようになるためには、「自己との関係において何らかの変化が求められる」(91)。つまり、問いとして a.家族に犯罪者をもつ者がいかにして語りえなさ乗り越えるのか b.いかにして「犯罪者の家族」としての体験を語るようになるのか、という二つが検討される。

本稿は事例研究を行い、「犯罪者の家族」としての体験の〈拒絶〉と「犯罪者の家族」としての体験の〈接近〉という二パターンを発見した。そして、〈拒絶〉と〈接近〉それぞれの語りの二類型を確認した。その後、〈拒絶〉から〈接近〉に移行した人の語りにとくに着目して、彼/彼女らが「犯罪者の家族」としての自己との距離を調整していくのかを検討した。

〈拒絶〉とは、自己や置かれている状況について考えることそれ自体から距離をとる語りであり、〈接近〉は他者との同一性の発見である。そして、〈拒絶〉から〈接近〉に移行する際の、自己の調整とは、(1)同じ属性をもたない他者との同一性を発見＝「犯罪者の家族」体験からの距離化をおこない(2)安全な私的空間の維持/事件以前からの重要な社会関係の維持という過程を経ることが確認された。

同じ属性をもたない他者は、「犯罪者の家族」を引き受けるために、「スティグマが自己の一部でしかないことを自覚し、『犯罪者の家族』としての自己を振舞える」(111)ようになるために、「常人としての役割の付与」(111)を果たすのである。

1.2.2 社会との折り合いをつけながら「犯罪者の家族」としての自己をどのように生きているのか

いわゆる後期ゴフマンは、相互行為秩序に焦点を移した。ここで重要になるのは、相互行為秩序の内部で、状況の文脈を読み取り、「自己を、いかなる状況を選択することがより適切であるかを判断しているのかと捉えた」(46)点である。さらにいえば、プロセスとしての自己をとらえるには、役割の取得と役割距離が重要になる。要するに、社会や他者の要請に応じて、役割を引き受けたり葛藤したりしながら自己を調整していく点をとらえるには、「自己が役割を引き受けた後に相互行為の場に参加していくプロセス」(46)を見ていく必要があるのだ。

6章では、正常と異常のもたらすサイクリックな関係へと閉じ込められることと、それによってどのように対処するのかが二人の人物の分析から記述される。サイクリックな関係とは、逸脱者が正常を希求し、その過程で異常がより確信されていくというポジティブフィードバックプロセスである。

サイクリックな関係の操作は、役割距離により可能になり、分析できる。なぜなら、役割距離は、「役割と自己の間にある齟齬を捉えることが可能な概念であり、二つの自己の裂け目を捉えることが可能になる概念」(122)だからである。ここで、役割と役割の裂け目を見るために、インタビュー場面が重要になる。なぜなら、インタビュー場面は「犯罪者の家族」という役割が調査者により付与され、語りを強制される場でもあるからだ。

非常に対照的な二人の語りを見ていこう。Eさんは、一見社会の正常理解に沿った自己呈示をしているように見えて、異なった家族的親密圏を作り出すことで、正常と異常を再定義していた。ここで、社会の目に映る正常とは、殺人犯の息子となったEさんにとって、カエルの子はカエルというものだった。つまり、まともに生きることは、社会にとっての普通ではない。つまり、社会の目からすれば、Eさんが異常になるのは、まともな家族をもち暮らすことだった。

逆に、社会における異常とは、Eさんのような犯罪や非行や自殺未遂といった経験を指す。彼は、そうした社会における異常な行動を社会における普通を求める過程で(友人などの他者との比較を通して)、自身の社会における異常さを認識し、それを裏書きするような行為を積み重ねていった。この社会の目から見た自己の正常/異常と、社会で通用する正常/異常の反転関係を認識し、Eさんは社会の側に沿わせる決断を行った。つまり、刺青を入れ、家族をもつという希求を断つことである。ただし、それだけでなく、犬を家族として暮らす、ということで社会における正常な家族規範をずらし、家族を得ることが可能になっていた。

反対に、Jさんは正常と異常を、異なった形で定義し運用していた。彼女は「こだわりのない晴れやかな境地」に達した人として描かれる。

彼女は、社会から見た正常/異常の役割を、爆笑することで一笑に付し、「犯罪者の家族」とは異なった自己を「性同一性障害」として提示する。151ページから154ページの非常に長いデータの引用は、とても感情が動かされた。とはいえ、Jさんの異なった自己呈示もまた、異なったスティグマによるダブル・ライフを招き寄せ、正常/異常のサイクリックな関係へと閉塞させられていた。

②の問いに対する答えは、「正常」と「異常」を読み替え、自己を再定義する形で、社会と折り合いをつけていた。だが、その折り合いのつけ方は、正常と異常のダブルバインドを脱するのではなく、異なった閉域が表れていた。同様の閉域は、7章で取り扱われる。

7章の〈ダブル・ライフ〉の新たな位相では、ピア関係を導入し、スティグマについて語らせるという調査者の相互行為の形式が、個人的現実を否定し、スティグマを付与してしまっていることが分析される。そして、そのことが新たな語りにくさを生んでいる。それは密閉性という言葉で表現されていたが、「犯罪者の家族」を語らせることで、「加害者の家族」の役割を引き寄せてしまうことである。つまり、被害者をおもんばかるという常人としての自己が生起し、被害と加害という相互反照的な関係のもとに、異なったダブル・ライフが生まれるのである。

補章では、家族が犯罪者となった者たちのそれぞれのライフヒストリーを重ね合わせ、多様な語りが確認された。そのうえで、本書が分析の示唆として提起するのは、家族のトラブルが公的領域に持ち出されたにも関わらず、家族の自助に頼る社会政策による排除と、地域社会による排除であり、親密圏の内外の区別が強化されて家族にポジティブな再定義がなされたことの批判的検討である。

最後に尻切れトンボのようになってしまったが、まとめというよりもタイトルの意味を書いておこう。朦朧体とは、「筆線でくくった輪郭を用いずに、モチーフの形態を直接に彩色または水墨で描くもの。朦朧体は明治期の日本で試行された日本画の画風で、空気や光線などを表現するために、輪郭線を用いずにぼかしを伴う色面描写を用いるもの」(太田智己「没骨／朦朧体」『アートワード：アートスケープ』より)である。つまり、対象を描くときに、周りを筆線で区切らずに、色を塗ってモチーフをできるだけ描きとるような手法である。朦朧体は、当時の批評家から酷評され揶揄された際の言葉だが、そこからこの技法は洗練され、新たなスタイルとして承認を受けていく。本書は、複雑で陰影を帯びた対象を、リジッドな線でくっきりとさせわかろうとするのではなく、データから淡く彩色していくことで、よりモチーフの陰影や複雑さを描き出そうとしたのではないか、というのがタイトルに出した私の見立てである。

2. 論点

○正常と異常の使い分けが何回読んでも、こんがらがってしまった。なんらかの形で概念を分けた方がよいのではないか。

○4, 5, 6, 7章、それぞれ異なったデータの取り扱い方(文字起こしの方法からしてそう)をしている。また、分析も異なった手法を用いている。それぞれ、なぜその手法を用いて、どのようにデータを取り扱っているのかについて説明が欲しかった。

○家族社会学として読み込むことがおそらく重要。家族を作らないために、体に徴をつける。家族のことを考えるために体を傷つけ徴をつける、という象徴的な対象関係が、章をまたいで読み取れた。この身体に徴をつける行為は、スティグマに可視性(visibility)を与える実践として読み取れるのではないか。つまり、スティグマの可視性は、他者に向けた告知の手掛

かりとなると同時に、自己の調整としても機能し得る。また、身体の徴はスティグマの原義に近い。となれば、刺青を入れたり、身体に傷をつけることも、それ自体がアイデンティティ管理として描き出せるのではないか。